

# 2004年度国際大学交流セミナー（中国文化大学）に関する報告と覚書

加藤幸治<sup>1)</sup>・野口泰生<sup>2)</sup>

1) 地理・環境専攻専任講師・2) 地理・環境専攻教授

## I はじめに

当国土館大学文学部地理学教室（以下、教室とする）では、2004年9月10日（金曜日）から9月16日（木曜日）までの期間、本学の海外協定校である中国文化大学（Chinese Culture University；台湾・台北市）を訪れ、「国際大学交流セミナー」を実施した。本報告は、その準備段階から当日の行動、帰国後の学生の反応までをまとめ、今回の「国際大学交流セミナー」の総括を行うことを目的とする。

そこで明らかになった問題点を記すことによって、今後、当教室において継続化を予定している同趣旨の行事（海外研修、海外巡検、国際交流）を実施する際の参考とするだけでなく、本学の他専攻、他学部における「国際大学交流セミナー」の実施、あるいは他大学の地理学教室においても今後実施される機会が増えるであろう同趣旨の行事を実施する際の参考資料となることを企図した報告である。

## II 実施までの経緯

### 1. 国際交流セミナー決定までの経緯

教室では2001年10月～11月に、財団法

人・日本国際教育協会からの補助金（予算額2,314,600円）を受けて、フィリピン・デラサール大学の教員（2名）・学生（11名）を招致し、国際大学交流セミナーを行った。また、この補助金交付を契機に、本学国際交流センター計上予算を利用した「国際大学交流セミナー」の実施を申請し、その決裁を受けて（2001年7月）、教室教員（2名）と学生（10名）のフィリピンへの「派遣」（現地見学、デ・ラ・サール大学との現地での交流）を行った（2001年9月3日～9日）<sup>1)</sup>。学生の「派遣」は学生の自費負担によるものではあったが、参加学生には概ね好評であったこと、また参加学生の後輩にあたる受験生が「国際交流」プログラムの実施を志望理由に受験し、教室の「国際交流」が広く周知されていることなどを受け、教室において今後の継続的实施を目標とすることとした。在学生がいずれかの学年において参加機会が持てるよう、実施は少なくとも4年毎、できる限り2～3年毎に行うことが教室会議において確認された。

2003年度から新たなる交流プログラムの企画・立案、さらには実施を目的として、教室内役割分担として野口・加藤の両教員を国際交流担当とした。野口を国際交流担当としたのは、野口自身の米国留学時の指導教授で

あった張鏡湖（Chang Jen Hu）氏が偶然にも本学海外協定校・中国文化大学理事長であったことが大きい。農業気候学の世界的権威である張理事長には2002年11月に本学から名誉博士号が送られた。授与にあたって国士舘大学に來学した張理事長から野口に、台湾への訪問を歓迎する旨が伝えられた。それはまさにデラサール大学との交流セミナーの次の機会と場所を探していた教室にとっては絶好のタイミングともいえるべき話であった。野口を担当教員とすることによって中国文化大学との交流が次の機会になることは既定化された。

野口の専門（自然地理学、気候学）とのバランスからもう一人の担当教員は人文地理学からということが暗黙の了解となり、加藤（人文地理学、経済地理学）が担当教員となった。

2003年5月には中国文化大学との簡単な日程を打ち合わせた上で、国際交流センターへ「国際交流セミナー実施計画書」を提出した。ただし、この計画書の決定は2004年4月24日の国際交流センター運営委員会の決定まで持ち越される。2003年度予算での「派遣」は別教室に決定され、予算は予定通り執行され、当教室の「派遣」が実施されることはなかったからである。この間、当教室では完全な待機となった。

野口の「特別な関係」がゆえに訪問先はスムーズに決まった。これは今後や別の機会にはあまり参考にならないであろう。しかし、このスムーズさが逆に2003年度（訪問前年度）における「待機」に結び付いてしまう。ここでの「待機」が2004年度（訪問実施年）における交渉スケジュールを遅らせてしまう

原因になった。予算化されてはいなくても、準備を進めておくことは実施年への仕事の「しわ寄せ」を避ける意味でも重要なことであった。これについては以下に詳述する。

## 2. 国際交流セミナー決定後から夏期休業前まで

2004年度の年度最初の国際交流センター運営委員会（4月24日）にて、当教室の中国文化大学への訪問を軸とする「国際大学交流セミナー」が決定・予算化されたことで、実施に向けた準備が本格化する。

決定以前にもセミナー実施予定に関する学生への周知は進められた。当教室では2年次生には必修科目がなく、また3年次生以上にも全員が同時に集まるような科目がないことから、周知は年度初頭のガイダンスにて行った。4月24日の実施決定後は、ポスターの掲示と演習など必修科目での連絡によって学生への周知を図った。

事務的作業の本格始動はGW明けの5月6日の野口・加藤の打ち合わせから進められた（第1表）。国際交流センターの事務的作業も同様であったと考えられる。とはいえ、実施日程は次に述べる現状から9月上旬に設定せざるをえないため、この日程は「初動」として早いとはいえない。すなわち実施日程は、平常授業と重ならないためには長期休業中しかない、事務的な問題からも年末年始や年度末は避ける必要がある、受入校の授業に重ならず、かつ受入校の事務対応も可能であるという条件を設定した場合、9月に新学年がスタートする海外協定校の多くの学年暦からすれば、訪問日程は9月上旬にしか設定で

第1表 国際交流セミナー実施までの経緯

年 月 日	行 事 ・ 連 絡 内 容
2003年5月	地理学教室より国際交流センターに対して、台湾巡検（国際交流セミナー）の申請
2004年4月24日	国際交流センター運営委員会で地理学専攻の台湾巡検（補助金の手当）承認
2004年5月6日	野ロ・加藤打合せ
2004年5月27日	国際交流センターの依頼に基づき、Dr. Chang 宛てに野ロより書簡郵送（国際交流センター経由）
2004年6月3日 ～6月9日	国際交流センターと Ms. Lee との間で調整。Dr. Chang も学長も歓迎している旨の伝言あり
2004年6月14日	学生説明会開催（鶴川校舎）
2004年6月15日	学生説明会開催（世田谷校舎）
2004年6月25日	中国文化大学の受入れ窓口である地理学教室・Dr.Shueh 宛てに野ロよりメール送付（Ms. Lee より転送される）
2004年6月28日	Ms. Lee より宿泊先（寮やホテル）の調整について国際交流センターに問い合わせのメール
2004年6月30日	参加希望書提出締切
2004年7月6日	参加者確定，学生へ通知（掲示）
2004年7月7日	国際交流センターより Ms. Lee 宛てに参加者リスト送付
2004年7月13日	Dr. Shueh より返事が来ないことに対して、国際交流センターより Ms. Lee 宛てに催促

きない<sup>2)</sup>。したがって、実施までには4ヶ月程度しか準備期間はなく、準備日程は非常に密にならざるをえない。前年度の準備が必要な理由はここにあった。実施が決まった場合のスケジュールなどは、「国際学生交流セミナー」である以上は調整事項でもあり、前年度に十分検討しておくことが必要である。

しかしながら、今回はそれが不十分であった。そのため、訪問希望地、交流プログラムの希望内容などを教室としては比較的急いで作成したものの、当然受入校での準備もあることから、すぐに返信はなかった。そのため、自費参加となる学生に必要な予算を伝えられないこと、また訪問計画も詳細には伝えられな

いことから、説明会は先延ばしされた。

夏期休業前に参加学生を決定しなければならないことから、説明会は6月14日（鶴川）、6月15日（世田谷）に実施されたものの、伝えることができた交流内容・スケジュール・予算はいずれも曖昧なものであった。曖昧な計画ながらも、未成年者を含む学生引率であり、かつ正規授業ではないことから、どうしても保護者の同意は必要であり、参加希望の申し込みにおいても保護者の内諾を受けること、内諾の内容について簡単に報告することを義務とし、6月末日を参加希望書提出日とした。この時点では計画の曖昧さに関する苦情等はなかったものの、説明会までのスケジュー

ルの確定、ないしは両校である程度了解されている計画の発表は今後の課題となろう。

参加希望書の提出にあたっては、参加希望学生が多数の場合、何らかの抽選等を行うことも考え、参加希望理由の他に、渡航経験、語学能力、健康状態などに関しても明記させた。募集人員（10名）に対する参加希望者は9名であり、抽選も追加募集もする必要はなかった<sup>3)</sup>。これはデラサール大学の際も同様であったが、この時点における「合理的」抽選方法については検討しておく必要もある。

その後、国際交流センターを中心に相手校との事務的な連絡は密に行われているようであったが、現地でのスケジュールそのものはなかなか決まらなかった。旅費の中で大きな比重を占める航空券については国際交流センターの手配によって比較的スムーズに決まったが、次に大きな比重を占める宿泊費は、スケジュールが決まらないことから確定できなかった。この状態で参加者への事前説明会を開催することには問題もあったが、夏期休業中は学生との連絡が取りにくく、また帰省などにより、実際に集合できない可能性があることから、7月29日（夏期休業直前）と9月6日（出発直前）を説明会開催日として確定、学生に周知し（7月15日頃。事務室経由で文書を配布）、実施した。7月29日の説明会では、海外旅行に対する心得、保険加入の方法、航空券手配上の必要事項確認（パスポートネーム、連絡先住所など）といった旅行手続きと、事前学習の説明を行った。「台湾」に関する入門的な新書（いずれも図書館所蔵）を6冊提示し、これを課題図書としてレポート作成することを事前学習の主な課題とした。また交流セミナーの性格上、英語に

よる自己紹介ができるようにしておくことも課題とした。

### 3. 8月から出発前まで

8月になっても確定的スケジュールは決まらなかった。8月上旬（出発1ヶ月前）には担当教員2名の連名で、実施延期の検討も含めた緊急的検討の必要性を訴える文書を国際交流センターに提出した。センターの問い合わせで、受入準備は着実に進められていることから、実施延期の検討は撤回し、連絡を待つこととなった。

事後的にみれば、こうした連絡の遅れにはいくつか理由があったと考えられる。今回だけに限られるような理由ではなく、今後も共通することが考えられる理由は以下のようなものである。第一には先方の学年暦である。連絡を待っている時期（6月～7月）は受入校の年度末（と年度末休業）にあたることから、受入校では迅速な対応が取りづらい。これは今後も必ず問題となるところであろう。第二には、歓迎の意志が強いほど受入態勢はある程度大掛かりになり、たとえ連絡を受けても個人の一存では「動けない」ということがあった。中国文化大学の受入態勢は全学的なものであった（第2表）。これらの部署が、年度末の休業期間中に、ほぼ同時に動くことを要求することは事実上不可能で、部署横断的な連絡会議が開催されたのは8月上旬の様子であった。準備段階の「機動力」はこうした事情から鈍かったようであった。

全学的歓迎は実際の訪問時に、はっきり認識できるものであった（詳しく後述する）。それが今回の非常に有意義な国際大学交流セ

第2表 中国文化大学による受け入れの責任分担

行 事	担 当 責 任 者
①空港での出迎え	Dr. Hsueh 地理学科主任 Ms. Lee 国際学術協力部事務長 (Director of International Academic cooperation)
②日程および交流議題の調整	Dr. Hsueh と Ms. Lee
③バスとホテルの予約	Mr./Ms. Chang 総務部 (General Affairs Office) 部長
④キャンパスツアー、セミナー、 歓迎夕食会、9/15の昼食	広報部 (PR office) および地理学科
⑤学生寮での宿泊	学生部 (Students' Affairs Office) と総務部

注) 中国文化大学資料による

ミナーの実現に役立っている。通常の旅行社に依頼した以上の密なスケジュールで、かつ地理学的に興味深いスケジュールを、受入担当者の地理学教室主任・薛益忠 (Hsueh Yi Chung) 氏が作成してくれていた。

8月20日頃、詳細なスケジュールが送付されてきた。英文での電子メールを翻訳後<sup>4)</sup>、速やかに学生に電子メールで配信した。7月29日の説明会で全員のメールアドレスを参加同意書に明記させておいたことが非常に役立った。また、スケジュールとともに、9月6日の説明会の予定、スケジュール決定ともなう新たな課題 (訪問先に関する事前学習) なども連絡したことで、9月6日の説明会はスムーズに進められた。ただし、電子メール連絡先として携帯電話メールを指定していた学生もいたため、事前学習の内容が全員に完全には伝わっていない部分もあった<sup>5)</sup>。緊急性と内容を全て伝える方法をトレードオフにしない (配信側の) 技術と工夫とが必要になる課題は浮き彫りにされた。

また学生の中には、事前説明会を旅行会社が実施する事前案内程度に捉えている者もあり、重要なセミナーの一環と捉える教員との

認識差があった。単位取得をとまなうものではないため、課題なども強制しにくい点もある。学習効果を上げるためにはある種の強制力も必要ではあるが、あくまで自主性に任せざるをえない点もあり、効果的な事前学習などの検討も今後の課題といえるであろう。

以上が事前の経緯である。次に実際の訪問スケジュールに沿った国際大学交流セミナーの内容を、箇条書き的ではあるが、振り返ってみたい。台湾での訪問地名とその位置については第1図を参照されたい。

### III 国際大学交流セミナー実施内容

#### 1. 9月10日 (金曜日)

##### 1) 空港

2004年9月10日 (金) 8:45 現地集合 (成田空港第2ターミナル) にてセミナーは開始された。学生の若干の遅刻はあったものの、ほぼ予定通りにセミナーはスタートする。10:55 成田空港発 (BR 2191)。13:15 台湾・中正国際空港着。パスポートコントロール内にて全員両替後、ゲートから出る<sup>6)</sup>。我々の

出場が遅かったためか、中国文化大学のスタッフを少し探すことになったが、ゲートそばですぐに互いを発見した。薛益忠地理学科主任、李翠蘋 (Tracy Lee) 国際学術合作組組長、日本語学科学生 3~4 名が、大きな赤い横断幕 (我々を歓迎する文字が印刷され、専門業者に作らせたと思われる) を広げて出迎えてくれる。横断幕の前で全員で記念撮影。中国文化大学広報部のスタッフであるビデオ撮影隊もいた<sup>7)</sup>。

## 2) 大型バスで大学へ移動

大型バス (大学名が車体に描かれた大学専用バス。通常は教員専用バスとして利用されているもの) で中国文化大学キャンパス (寮) へ移動。日本語学科の女子学生 (日本に留学したため 5 年生) で、今回のアシスタント兼通訳の楊さん (楊雅琇: Yang Ya Shiu) の紹介、今日の予定説明などがバス内にて行われる。代表である野口には理事長と学長名の入った正式なレセプション招待状が渡された (国士舘大学地理環境系の名前も印刷されていた)。

## 3) 学生寮へチェックイン

中国文化大学到着 (15:10)。女子学生は女子寮 (大雅館) へ。女子は 6 人部屋で全員 (5 人) 同室。その後、女子は校内を案内されるとともに、中国文化大学から取材を受ける。

男子と教員は 4 階建ての男子寮 (大恩館) に案内され、部屋割り。男子学生は 4 人部屋 2 つを各 3 人で利用する。野口と加藤は別々の部屋で、2 人部屋を 1 人ずつ使用した。部屋にはベッド、イス、作りつけの机、ハンガー

付キャビネット、シャワーとトイレのバスルーム、蒸留水装置が備わっていた。

## 4) 表敬訪問

野口・加藤は理事長室応接間に案内される。張鏡湖理事長、李天任 (Lee Tien Rein) 学長、薛益忠地理学科主任、李翠蘋国際学術合作組組長も同席して 30 分程度歓談。国士舘からのプレゼント贈呈。新学長は夏休み前に、林彩梅前学長から代ったばかりであった。

## 5) 国際交流センター (国際学術合作組) および地理学科を案内

中国文化大学国際交流センター (国際学術合作組) へ案内される。その後、薛益忠地理学科主任の研究室で、野口、加藤、李翠蘋国際学術合作組組長の 4 名で歓談とスケジュールの確認をする。同時に地理学教室のフロアを簡単に紹介される。雨が降りはじめ、その後、土砂降りになる。地理学教室から置き傘を借りるが、結局滞在中はほぼ 1 週間、雨が続き、在台湾中、傘は借りっぱなしになった。

## 6) レセプション (17:45~20:30)

レセプション会場 (大学近くのレストラン; Chimney Restaurant) へ徒歩で移動。学生と教員が合流。張理事長、李学長、陳鵬仁日本語文学系科長、日本語学科の楊さん (アシスタント) がすでに待っていた。

レセプションパーティ開始。洋食のフルコースで、バスの中で取られた希望通りに一人一人メニューが異なる。李学長による歓迎の挨拶 (英語)、野口によるお礼の挨拶 (英語) があった。外は土砂降りだった<sup>8)</sup>。

## 7) プレゼント

野口・加藤に対してプレゼント（名刺入れと手鏡セット、ネクタイ、暁峯記念館落成記念立体カード、張理事長の著書）。学生へプレゼント（名刺入れと手鏡セット、暁峯記念館落成記念立体カード）。地理学科からは教員へ8種類の地図（台湾全図2種類、北・中・南・東台湾観光地図、台北 MRT 地図、台北地下鉄地図）。学生へ6種類の地図が渡される（観光協会発行のもの）。

## 8) 寮へ戻る (20:30)。

土砂降りの中、帰寮。21:00 過ぎには大学中が停電する。珍しいことではないらしく、中国文化大学学生はろうそくなどを準備しており、それを付けていた。初日であること、停電に慣れていないことから加藤の様子を聞きに来る学生もいた。

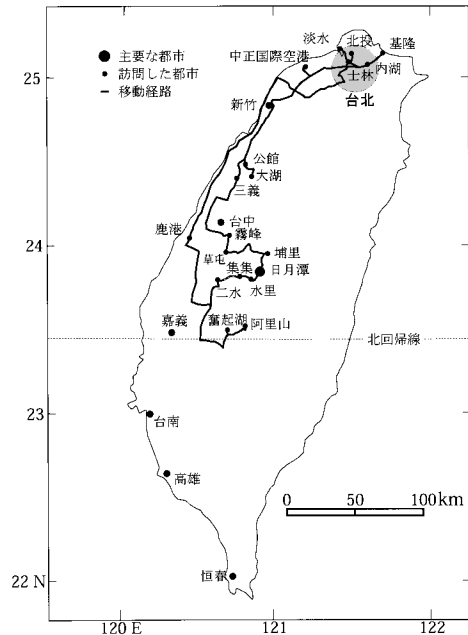
## 2. 9月11日(土曜日)：台北市内のバスツアー(一日中、雨)

### 1) 朝食

大型貸し切りバスで台北市内のバスツアーへ出発(8:00)。薛益忠地理学科主任と楊さんが案内役。大学寮内には食堂はなく、学生は「外食」せざるをえない様子である。「アジア的」といえるのかもしれない。この日は市内のマクドナルドで朝食とする。

### 2) 淡水(Danshuei)

台北市を流れる淡水川の河口都市・淡水まで行く。晴れていれば、対岸の山や台湾海峡が見える風光明媚な町とのこと。川にかかる大きなアーチ橋(情人橋; Qing Ren Qiao)



第1図 台湾訪問地図

やオランダ統治時代の建物(紅毛城; 現在レストラン)を見て、淡水の古い街並みを MRT(台湾高速鉄道)淡水駅まで川に沿って歩く。MRTのプラスチック製乗車券を土産として買う者も多かった。

### 3) 北投(Beitou)

日本統治時代に開発された温泉。北投温泉博物館(日本統治時代の洋風公共浴場)や地熱谷温泉景観公園を見学する(11:30~12:30)。

### 4) デパート(大葉高島屋)で昼食

大葉高島屋のフードコートにて昼食。週末で賑わっていた。

### 5) 国立故宮博物院 (National Palace Museum)

「台湾観光年」のため、外国人観光客は入場無料だった。博物院の大半が改修中のため、見学可能な部分は本来の4分の1以下であることも関係しているのかもしれない。改修工事は2006年完成予定。

### 6) 内湖 (Neihu、台北市の東側の区)

ソフトウェアハイテク工業団地の立地場所として有名。バスで通過し、車窓より見学する。台北市は東に向かって発展しており、新宿副都心のような高層建築物の景観が続く。

### 7) 世界一の高層ビル (Taipei 101)

101階建て、高さ508mで、2004年末現在、世界一の高さのビルである Taipei 101 を間近に見学し、バスを降りて写真撮影する。ただし、上層階はまだ工事中であった。

### 8) 龍山寺 (Lungshang Temple)

「龍山寺」は広東省・福建省(泉州)から渡ってきた中国人が建てた寺で台湾各地にある。台北の観光地としても有名な龍山寺が最も有名である。龍山寺のある一帯は台北市の古い街並みで、高層建築物は少ない。

### 9) 自由行動

MRT 台北駅で一旦解散。ほとんどのメンバーは楊さんに連れられて、夕食(焼き肉食べ放題の店)へ。路線バスを利用して帰寮する(22:00過)。

### 3. 9月12日(日曜日):台北から台湾中部へ(台北は雨、台湾中部は曇り)

#### 1) 集合(7:30)・出発

昨日と同じ大型バスで出発(7:40)。薛益忠地理学科主任と楊さんが2泊3日の巡検に同行してくれる。朝食は前日同様、マクドナルドでテイクアウトし、車内で食べる。

大型バスでフリーウェイ(高速道路)を南下する。台湾の道路網はフリーウェイ、国道、郡道などに別れており、フリーウェイのみ有料で、30~40kmごとに料金所(Toll Gate)がある。一区画30NTで北から南端まで10区画に別れる。南北の道路が奇数、東西が偶数で呼ばれている点はアメリカ合衆国を真似ている様子。道路などのインフラ整備が進んでいる。

#### 2) 台湾唯一の石油・天然ガス採掘場見学

台北から新竹工業団地 SA (9:15) を経て、台湾中部の苗栗縣(Miaoli)文水溪へ移動。中国石油の大湖採掘現場(10:15)および台湾油礦陳列館(日曜日のため休館)の様子を見学する。褶曲構造の地層で背斜構造をしたところに石油(すでに枯渇)や天然ガスが溜る。採掘は中国石油が独占している。苗栗縣大安川の地すべり地も車窓から見る。

#### 3) 郊外の農業(観光農業)

台湾はWTO加盟後、新農業が定着し、高付加価値型農業(果物、野菜、観光農業)が展開されている。イチゴの栽培地・大湖(Dahu)の観光草莓園を車窓から見学する。



#### 4) 特別伝統工芸都市・三義 (Sanyi)

苗栗縣南部にある彫刻の町。飛驒の高山のような一刀彫の店が続く街並み。木彫博物館を見学する (11:50)。

#### 5) 清水 SA で昼食

野口、加藤は薛益忠地理学科主任に案内されて、台湾風あんかけ焼きそばの昼食 (フードコート)。カジキマグロのつみれ団子のよななものもごちそうになる。台湾では珍しいものではない様子であった。

#### 6) 921 地震断層

台中縣 (Taichung) と南投縣 (Nantou) の地震 (1999年9月21日) における被災地の爪跡と再建地区を見学。

この地震で大被害を受けた霧峰 (Wufon) 地区や草屯地区を見て回る (14:35~15:10)。921 地震教育館 (921 地震教育園区国立自然博物館) がまもなく開館予定であった。

#### 7) 埔里酒廠

埔里は紹興酒産地としても有名。921 地震で大きな被害を出した埔里酒廠 (醸造所) を見学 (16:20)。各種の酒や紹興酒アイスクリームなどを販売している。

#### 8) 台湾の「地理的中心」である埔里 (Puli)

「台湾の地理的中心碑」が建っているが、その背後に大きな地すべりが発生しており、改修中であった。

近くにある 921 地震被災者の仮設住宅を見学。被害が大きく、土地区画も不明となり、マンションを新設中といった事情もあり、仮設住宅が長く利用されている。

#### 9) 日月潭 (Sun-moon Lake) へ

湖畔の「景聖楼ホテル」に滞在する。ホテルは目の前にある文武廟の直営であった。眺望はすばらしく、回転テーブルでの夕食も本格的中華料理であった。観光型のホテルではテーブル単位の料理が基本らしく、人数割りは問われない様子で、5人で食べようと7人で食べようと、値段は同じであった (少人数用はある様子)。

#### 4. 9月13日 (月曜日) : 日月潭から阿里山へ (晴れ・曇り)

##### 1) 日月潭

起床 (6:00)、朝食 (7:00)。日月潭は緑色をした幻想的な湖。日本統治時代 1919 年に発電所 (潭抽蓄発電=揚水式発電) が建設され、湖水面積が増大し、現在の大きさととなった。

##### 2) 文武廟

ホテルの前にある廟で、文聖 (孔子) と武聖 (関羽) を祭る。1999年9月21日の大地震で大きな被害を出したが、今年再建。廟の管理人の一人は日本語 (小学校で習った) を話す老人であった (7:30)。

##### 3) 原住民の村と玄奘寺

湖畔に住む原住民の村 (九族文化村) を歩く (8:30)。

玄奘寺には唐三藏玄奘法師の骨 (南京から軍が持ち出し、一時日本にあったが台湾に「返還」された) が納められている。

#### 4) 慈恩塔 (Tsen Pagoda)

日月潭を見下ろす山の上にある高さ 45 m の九重の塔 (鐘楼)。蒋介石が母親の供養のために建てた。回り階段で上まで上れる (9:10)。

このあたりにはピンロウ (毛王爺: ヤシ科の植物) 畑が多かった。台湾中部ではピンロウの栽培が近年急速に盛んになっている。覚醒作用のあるこの実を、露出度の高い女性が道路際のボックスで売っていることが多い<sup>9)</sup>。買い手は自動車・トラックの運転手が多いとのこと。ピンロウの樹林は根が浅いため、地すべりを誘発しやすいことから、取締り強化の動きもあるとのことであった。

#### 5) 水里 (Shuili) 蛇窯

周辺は台湾大学の実験林など公有地が多い。水里蛇窯 (長さ 100 m 程度、15 度の傾斜をもつ登り釜による焼き物) を見学 (10:45)。ここは日本統治時代に日本人によって開かれた窯で、先駆者である日本人の写真が飾られていた。窯元であると同時に、作品の展示も行なっている (ミニ博物館・美術館)。ろくろ作業を見学したり、釜の中を歩く。2~3 ヶ月に一度は火を入れ、1,100~1,200℃で焼く。雨が多いため、釜を使わないと壊れてしまうことから、釜は使い続けられている。

#### 6) 集集 (Chichi、1999 年 9 月 21 日の地震の震源地)

日月潭水力発電所建設のため、日本統治下の 1919 年に集集線開業。1922 年 1 月 15 日、発電所が完成し、支線が開業した。集集駅の横にある小さな博物館を見学 (11:30)。昼食後、ローカル線 (13:08 発) に乗って、

二水駅まで行く (13:45 着; 運賃・30 元)。途中、車窓から地震の爪跡 (曲がったレールなど) が見える。バスは二水駅で我々をピックアップ。

#### 7) 阿里山 (Alishan) の山岳道路

バスは阿里山に向かう。車窓からは熱帯林、暖帯林、温帯林 (落葉広葉樹林)、針葉樹林と標高が高くなるにつれて変化する植生を観察できる。また、阿里山は高山茶の産地であり、道路際のあちこちに茶畑と茶の加工所がある。

阿里山の急斜面につけられた曲がりくねった舗装道路は、大雨でいたるところの崖が崩れ、道路も一方通行の箇所があった。霧と雨で視界が悪く、ウィークデイのためもあってか行き交う車もほとんど無かった。学生の中にはひどく車酔いした者が出た。

#### 8) 阿里山で一泊

登山電車の二萬平駅 (標高 2100 m) にある阿里山青年活動中心 (ユースホテルであるが、山のホテルという感じの立派な建物) に宿泊 (17:30 着)。他には 1 組 4~5 人の客のみ。夕食 (18:00) はテーブル単位の料金であった。夕食前後から外は土砂降りの雨。

#### 5. 9 月 14 日 (火曜日) : 阿里山から鹿港へ (晴れ・曇り)

##### 1) 森林鉄道で阿里山へ

日の出見学のため、早朝 3:00 に起床。ホテルの気温は 15℃。バスでホテル発 (4:00)。日本がかつて敷設した森林鉄道 (現在は観光用の登山電車・阿里山鉄道) に乗る。宿泊し

たユースホテルの場所（二萬平、標高 2100 m）から、阿里山駅（4：40 発）⇒沼平⇒対高岳⇒祝山駅（5：15 着）。祝山駅から徒歩で山頂の観日平台へ。山頂で日の出を見る。気温 11℃。

## 2) 阿里山巨木公園

祝山駅発（6：20）、沼平駅下車（6：35）。阿里山森林散策区を歩く。森林内が木道で整備されていて歩きやすい。樹齢 1,000～4,000 年の杉（柳杉：Chinn Cedar）や檜（台湾紅檜：Taiwan Red Cypress）が保護されている。

阿里山駅近くの遊客服務中心（ビジターセンター）や土産店の集まるところまで、徒歩で散策する（8：20 着）。飲食店で食事。ビジターセンターで阿里山の自然に関する VTR を見る。

## 3) 奮起湖駅

嘉義市と阿里山の間で最大の駅。森林開発のために使われた阿里山鉄道であったが、最初の汽車は奮起湖駅から先の急坂を登れなかった。新しい汽車を導入することで全線利用可能となり、奮起湖駅は汽車の付け替え駅となった。付け替えのために列車が長時間停車することから、奮起湖駅の駅弁が有名になった。駅弁はもちろん日本人が導入したものである。現在、奮起湖駅は古い機関車や機関車の修理機械等を展示し、博物館を兼ねている。

昼食として駅弁を注文し、阿里山を下るヘアピンカーブを繰り返すバスの中で駅弁を食べた（11：30 頃）。

## 4) 濁水溪

日月潭を水源とする台湾最大の河川を途中横切る。言葉通り、白濁した水が広い河原をつくって流れる暴れ川であり、周辺にはセメント採取場も点在する。

## 5) 鹿港 (Lugang)

鹿港着（14：10）。気温 30℃以上。彰化市の南西にある古い港町。清王朝時代の重要な港湾都市であり、かつては台南、台北と共に重要な港だったが、海退（隆起）に伴い海岸線が 5 km も後退して海ははるか先になってしまった。高速道路や鉄道路線からも外れていたことから衰退傾向が著しく、現在は「古都」して、観光によって存立している。カキ養殖も行なわれていることが有名で、露天でも販売している店が目立った。

文武の神様、文＝孔子、武＝関羽を祭る廟「天后宮」が町の中心にあり、広場をつくっており、観光の中心でもある。その周辺は、かつて「不見天」（店の庇で空が見えない）と呼ばれた屋台街であったが、日本統治時代に都市計画・再整備され、洋風建築に変わった。

中央政府の補助を受けて文化遺産としての街並み保存が進み（くねくね曲がった細い路地：九曲巷など）、地方政府の観光資源となっている。明かり取りの天窓がある旧型家屋が建ち並ぶ。ちょうど旧暦のお盆にあたる時期で、紙幣をかたどった紙を燃やしたり、玄関先にお供え物を置く家が多かった。

もう一つ重要な観光拠点である龍山寺を見学。台北の龍山寺と違って建て替えられておらず、古い様式を残していて、台湾の文化財として認められている。

## 6) 台北へ

鹿港見学後、台北に向けて出発（15：30）。道路、高速道路の混雑で、台北には夜に到着。途中、SAにて夕食。「（日本式）ラーメン」と称するものを食べたが、全く別の味の食べ物。麺には（日本の）うどんの乾麺が使われていた。「現地の味」としては好まれているかとも考えたが、薛益忠地理学科主任にも不評であった。中国文化大学には21：20に到着した。

## 6. 9月15日（水曜日）：大学キャンパスツアー、両校の交歓会、基隆港見学（雨）

### 1) 朝食

大学の周辺で各自朝食。新学期のオリエンテーションが始まり、新入生、クラブの勧誘で、キャンパスが賑わい出した。大学周辺の道路脇は駐車した車とオートバイ（スクーター）で埋められている。大学の送迎用大型バスも盛んに出入りして、新学期の風景であった。

### 2) キャンパスツアー（9：00）

中国文化大学は1926年創立。創設者は張理事長の父親の張其胸氏（元文部大臣）。

大学内では以下の各施設を見学した。

歴史資料館：創設者、現理事長、歴代学長の写真、各国の政治家や大学との交流の歴史資料と記念品の陳列。

図書館：1999年3月完成の新しい建物。6階に日本・韓国などの図書を集めたセクション、7階に大小各種メディア室。その他、学習室など。

地球資源デジタルセンター（数位地球研究中心、Digital Earth Research Center）：

センター長は地理学科の教員（アメリカ合衆国の大学にて学位取得した教員で、訪問時は海外旅行中だった）。女性職員（ワシントン大学卒業の技術者）が説明にあたる。IKONOS画像（解像度1m）は韓国経由で、Quickbird（解像度0.6m）は企業を通して購入している。華岡、華衛二号ROCSAT（解像度2m）、Terra Satellite、USEP-3も入手可。最近の台北市、バクダッド、北朝鮮の核施設の大縮尺画像も展示。全員で記念撮影をした。

地理学科地図学ラボ：女性教員・高（Kao Ching Jen）氏（アメリカの大学卒）が管理している。カールツァイスの図化機のほか、各種製図機器がある。パソコンソフトウェアを用いた主題図の作成を学生に課しており、きれいに仕上げられた提出課題もファイルされていた。中国文化大学ではGISやRSに関連した委託業務を国や個人企業から受けていた。ただし、これら業務委託は台湾大学と中国文化大学を中心になされており、どの大学でも行われているようなものではないとのこと。

### 3) 地理学科および日本語学科の教員・学生との交歓会（10：30～13：30）

50人程度入る国際会議場にて意見交換。国土館大学文学部中国文学専攻内山慎吾君も加わる。地理学専攻の日本人学生一人一人に発言の機会が与えられ、それに対して、中国文化大学の地理学科大学院生が答える方式であった。中国文化大学の参加学生は地理学科の院生5人、日本語学科の学生数人であった<sup>10</sup>。時間が十分ではなく、学生全員が話す時間はなかった。日本語学科のサイ先生が通訳を担当してくれた。

交歓会には張理事長、李学長も加わり、昼食会（12：25）となる。キャンパスツアーの様子がすでに中国文化大学のホームページにアップロードされており（<http://epaper.pccu.edu.tw/index.asp?NewsNo=5495>）、スクリーンで紹介される。広報部の動きは活発で、常にスピーディーとの印象が強い。昼食会では李学長から、交流継続を希望する旨の挨拶と、野口からの正式なお礼の挨拶もなされた（いずれも英語）。

ここでは薛益忠地理学科主任から、学生を含む当教室からの訪問者全員に中国文化大学編集の「大台北：衛星影像地図集」（A3版ハードカバー）およびCD-ROMを贈呈された。

#### 4) 基隆

午後、近くの陽明山（Youngmingshan、王陽明から取った名前）国立公園を訪問予定であったが、雨と霧のため中止し、台北からも近い基隆へ向かう。

基隆港を見学（15：00）。高台の廟から港を見下ろす。断層線による深くて狭い天然の良港（商業港、軍港）。基隆（人口30万）は台北市の外港の役割を果たし、古くから発展した街で、戦前には基隆－神戸定期便があったことでも有名である。海運会社を核とするEvergreen（長榮）groupの拠点のひとつとなっている。

ただし、天然の良港であるがゆえに大型船舶にとっては出入港に不便で、現在、港湾としては高雄市（人口140万人）の港湾（ラグーンに建設された人工港）に追い越される形となっている。

基隆港そばの碧砂漁港に立ち寄る。観光港

湾として整備されており、魚市場やそこで購入した魚介を調理してくれるレストランなどが並ぶFisherman's Wharfとなっている。

#### 5) 若者の街「西門」と士林夜市

「台湾の渋谷」とも呼ばれ、若者でにぎわう「西門」へ行く。地下鉄「西門駅」周辺のファッション街は渋谷やNYのSoHoに似た雰囲気を持つ。もともとこの周辺には、福建省からやってきた2つのグループの居住地区の間に、互いの接触を避けるために築いた壁があった。日本統治時代に壁を取壊して広場が作られた。その広場が、発展していき映画館やデパートが建つようになった。ここ数年若者が集まる街になり、政府が西門城再生計画を立てている。

西門から士林へ移動し、士林夜市へ。学生と教員・院生のグループに別れる。教員グループは屋台での食事後、薛益忠地理学科主任の自宅へ招かれる。24時間守衛付きの高級マンションの最上階・12階。上層階はそれぞれ1世帯しか住んでいないマンションであった。薛夫人を交えて歓談する。夫人の父親は、戦前、日本統治下の台湾の国民学校を経て、岩手医学専門学校（現岩手医科大学）に進学。日本で医師として働いていたこともあった。歓談後、大学まで自家用車にて送ってもらう。

#### 7. 9月16日（木曜日）：中正紀念堂と中国工芸センター（雨）

##### 1) 大学を出発。

各自朝食後、教員は李翠蘋国際学術合作組組長と男子寮の1階にて会計手続きを済ませる。

## 2) 台北市内見学・買い物

まず9月11日に時間と天候から立ち寄れなかった中正紀念堂（CKS Memorial Hall、CKS=蔣介石）を見学する。11：00の衛兵交代式を見学する。台湾は徴兵制で、薛益忠地理学科主任の子息も徴兵期間中だった。

台湾大学同窓会館で昼食（飲茶料理）後、国立中国工芸センターで買い物。国営のお土産センターといったところ。薛益忠地理学科主任から野口・加藤にお土産を渡された。

## 3) 中正国際空港・成田空港

空港へ向けて台北を出発。チェックインまでは1時間程度しかないが、高速道路は混雑していた。走るように飛び込んでチェックイン。楊さんが要領よく相手に航空会社職員に説明してくれたので、何とか間に合うような形になる。空港での買物や両替のため、時間が無くなり、見送ってくれた薛益忠地理学科主任と日本語学科学生・楊さんへの御礼もそこそこに、慌てて搭乗する。14：55（BR 2196）発。

成田空港には予定通り到着。学生へ事後学習会、反省のため、数日内に感想、意見等をまとめておくことを指示して、空港にて解散した。

訪問時、台湾では被害が出るような台風の直撃を受けたが、日本からの「客人」を歓待するために、中国文化大学側は悪天候にもかかわらず、非常に密なスケジュールを実行してくれたことが、上記の記録からもうかがえるであろう。「客人」歓待は台湾の人々に共通する意識のようである。また日本人であるがゆえに親しみ深い感情を持っているからこ

そという側面もある。台湾はアジア諸国・諸地域では「例外」的に対日感情が良好である<sup>11)</sup>。日本統治時代に台湾の基盤整備、衛生環境の整備などが進められたことがその背景にあるといったことが一般的には説明されている。短期間の訪問ではその本質的な根源までをうかがい知ることはできる由もないが、日本人への一般的な「親しみ」の感情が歓待とも結び付いている点はある。

野口と張理事長の「特別な関係」が歓待をさらに大きくしていることも間違いない。交歓会においては大学内の国際会議場を利用したが、日本から毎年訪問する日本の他大学（中国文化大学協定校）が来ても、国際会議場までは利用したことがない、ということをも日本語学科の教員は話していた。国際交流において「特別な関係」が必ずしも必要とは限らない。デラサール大学との交流プログラムではもともと大学間の協定以上の関係はなかったが、一定以上の関係を構築できている。ただし、この場合も早い段階から相互訪問が決まっており、それが奏功している点是否めない。

「特別な関係」や相互訪問が当初から決まっていたことなど、当教室がこれまで行ってきた国際大学交流セミナーには「好条件」が多かったと考えられる。そうした関係がない場合においても、国際大学交流セミナーを「成功」させるためのノウハウの蓄積は、国際交流センターだけに頼らず、教室としても行っていかねばならないと考えられるが、それは、これまでのところ「幸いにも」今後の課題である。

## IV 事後学習会・学生の感想

帰国時に指示した事後の学習会は、夏期休業明け後、ほぼ平常に講義が開始されるようになった頃を見計らって、10月7日に開催した。

国際大学交流セミナーに参加して、実際に訪問したことで良かった点と、一方で悪かった点、あるいは今後の事業において改善すべき点を、それぞれ数点以上あげることを課題としており、それを発表させる形式で、事後学習会を進めた。また、最終的には自分にとっての満足度、成果などを総合した「点数」を10段階で評価させた。

### 1. 評価点・改善すべき点

学生の評価は多く点で表裏一体となっているものであった(第3表)。多くの学生があげた「観光地ではない、いろいろなところに効率よく行けて良かった」という積極的な評価は、一方では「スケジュールが詰まりすぎ」、

「自由時間がない」といった消極的な評価にもつながっている。また中国文化大学の全面的な協力があればこそ、大学のバスをほぼ1週間独占的に使うことを可能にし、それゆえに「効率的」なスケジュールで、「楽」に移動できた。しかしながら、その歓迎ぶりによって、学生同士の交歓会がかえって「公式」的な行事となってしまう、学生同士で自由に話す機会が十分にあったとはいえない状況になった。それをもっとも多くが改善すべき点として指摘した。

参加者の語学能力(学生のほとんどが中国語はもちろん、英語での会話能力を持っていない)から、学生同士で一对一のコミュニケーションを取ることを要求するのは、学生にとっても「厳しい」のではないかと考えていた教員にとって、これは意外な反応であった。事後的にみれば、事前説明会において、今回の台湾への渡航は「巡検」ではなく、「国際大学交流セミナー」であり、直接、台湾の学生とのコミュニケーションの場があることを強調しており、そのことが奏功していたといえ

第3表 学生のあげた主な評価点・改善すべき点

評価点	改善点 (悪かった点)
・地理的な見所(観光地以外)に行けた	・交歓会に関して
・植生環境の違いが観察できた	・時間が短い。会場が大きすぎる。話す機会がなかった
・「生」の台湾に触れられた	・スケジュールが事前に詳しく分からなかった
・大学バス利用について	・スケジュールが詰まりすぎている
・効率的で良かった、楽だった	・自由時間がほとんどなかった
・大学寮に宿泊できた	・天候に恵まれなかった
・台湾の人と直接話す機会があった	
・費用が安かった	
・海外体験による驚き・発見	

よう。また、一般に海外旅行の機会が増えている現在、ある面では「自由」がない教室行事に参加する学生は、海外に行くことそのものよりも、「現地」の学生やその他の人々と直接交流する機会を期待して参加していることの証左ともいえよう。こうした積極性を持ち、かつそれを許す経済的・時間的「余裕」のある学生は、約 290 人の当教室の学生・院生には必ず 10 人程度（3～4%）いると考えれば、前回・今回とも募集人数に対する学生の希望者がいずれもほぼ 10 人であったことも必ずしも偶然ではないと考えられる。「巡検」を中心とした行事を行った場合は、より多くの学生が参加希望してくる可能性と、それならば「自由」に旅行することを選ぶ学生が多くなり、逆に参加希望者が減る可能性の両方のケースが考えられる。

また教員にとって、学生寮への宿泊が好評であるのもやや意外な点であった。ヘッドフォン・ステレオを「楽しみ」、携帯の画面を繰り返し見るなど、「個」の空間を持つことに慣れている学生には、それほど親しくない学生同士での宿泊や、電話などない施設での宿泊は好まれないと考えていたからである。寮の宿泊代は中国文化大学の協力によって無料であった。ただ寮の宿泊は「安かったから良かった」と評価されたよりも、現地の学生と「同じ」体験をできた点に評価が高いようであった。「（台北の市中心部から離れた）寮ではなく、市内のホテルに泊まれば、『自由時間』も多かったかもしれない」との問いにも、それよりも寮の体験を評価する学生の意見が多かった<sup>12)</sup>。「積極的な学生」ゆえの評価かもしれないが、「現代学生気質」をステレオタイプ的に適用していた教員側の問題を

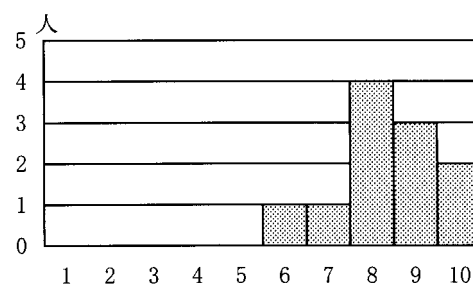
示しているといえるのかもしれない。

改善点としては、半数の学生が、上述してきたスケジュールの決定が遅れた点をあげた。当然の意見であるとともに、「連れて行かれる」のではなく、自ら積極的に参加する学生だからこそ、そうした要求が強くなるとも考えられる。これは事後学習会で、また本報告で提示してきたとおり、教室にとっての今後の課題であることをあらためて明記しておく必要がある。

## 2. 総合評点

表裏一体的な点が多く含まれる積極的・消極的評価や、スケジュール発表の問題点も踏まえ、「では全体として『点数（10段階評価）』を付けるとすれば何点か」という質問に対する学生からの回答をまとめたのが、第2図である。

満点2人をはじめ、9が3人、8が4人という評価を得た。6という評価であった学生は自らの体調不良と事前学習の「課題」が多かったことを減点材料としてあげていた。とはいえ、それを含めても平均で9.2という高い評価であった。引率教員を目の前のした評価ということから、数値はやや積極的評価に偏る点を加味しても高い総合的評価であった。



第2図 参加学生の総合評価（10段階評価）



評価点、改善点、総合評点を合わせてみれば、「スケジュールが決まらず、かつ現地では密なスケジュールで良い点も悪い点もあったが、台湾との直接的な接点を持ち、良い体験となった」というのが、学生・院生を通じた評価といえるのではなからうか。意見としてはあげられてはいないが、学生の全体的な「表情」などからもそうした評価ができるのではないかと考えている<sup>13)</sup>

## V おわりに

以上の評価などを踏まえ、本学国際交流センターや中国文化大学地理学科・国際学術合作組へのお礼と報告を行った。また中国文化大学理事長、学長にもお礼状を送付し、2004年内には2004年度の国際大学交流セミナーの行事・事務手続きなどをすべて終了した。

ただし、中国文化大学に一方的負担を掛けたい行事として終わらせないためにも、外部的資金を利用した本学への招致も申請可能であることを中国文化大学地理学科に呼びかけ、相互交流の機会を模索している(2004年末現在)。中国文化大学側の事情、外部資金の申請受諾の可否など、簡単に受入が可能にはならないではあろう。しかしながら、教室としての「国際交流」プログラムを継続的に実施する予定に変更はなく、中国文化大学との関係において、あるいは全く別の形で今後も「国際交流」プログラムを進めていく。まだまだ蓄積しなければならないノウハウは多い。本報告はそのための「覚書」の一つであることは冒頭に述べたとおりである。

今回の中国文化大学との国際大学交流セミナーにあたっては、国際交流センターの渡邊俊弘課長ならびに今回の担当となって尽力してくれた松山みづき氏(現総務課)には大変お世話になった。あらためて感謝したい。また、ここには名前をあげられなかった中国文化大学、国士舘大学のスタッフにも支えられてこそ、今回のセミナーは実施可能となったものである。それらの方々にあらためて感謝申し上げます。

## 注

- 1) デラサール大学との交流プログラムについての報告は、教室ニューズレター 28号にある(<http://bungakubu.kokushikan.ac.jp/chiri/NewsLet/NEWSLE28.pdf>)。
- 2) 2003年5月段階の打ち合わせでもそのようになっていた。
- 3) 引率上、人数は10名程度が適した数であり、国際交流センターの「国際大学交流セミナー」の条件としても10名という人数が記されている。  
今回は学生募集終了後、定員に余裕があることと教員の勧めもあって、大学院生1名が参加することになった。
- 4) 地名の英語(ピンイン)表記には必ずしも統一がないためか、観光ガイドなどの表記と異なることも多く、スケジュールに記された地名を漢字化するには時間を要した。
- 5) 携帯電話メールの文字数制限と送付したメール内容の区切りがたまたま合致していたことが主たる原因である。
- 6) 参加者全員から共通的な費用を現地通貨で集めた。それを入場料などの支払いにも利用することで団体入場なども速やかに行

うことができた。

- 7) このビデオや表敬訪問の様子が「大学ニュース」のような形で、中国文化大学のホームページに掲載された (<http://epaper.pccu.edu.tw/index.asp?NewsNo=5475>)
- 8) これは台風による雨で、台北市内の低地では洪水となり、被害が出たほどであった。
- 9) ビンロウは現地の物価に比してかなり高価なものであった。加工せずに皮をむいて（ガムのように）噛むものであり、現金収入化しやすいことから過剰な栽培が広がってきているとのことであった。
- 10) 国士舘大学からの記念品（国際交流センターが行事用に常に用意しているもの）を全員に配った。
- 11) 台中巡検で出会った日本語を「習った」老人は、我々が日本人と分かれば、必ずとっていいほど非常に友好的に話しかけてきて、「国民学校」で日本語を「習った」ことを話していた。
- 12) 最終日の前くらいは市内に宿泊して「お土産」を買う時間があっても良かったという意見はあった。また参加学生はいずれも大学寮に入居したことのない学生であるため、寮宿泊は短い時間の「異文化」体験ゆえの積極的評価かもしれない。
- 13) 学生の「表情」など、台湾での写真については教室ホームページにて公開している。次の URL を参照されたい。 <http://bungakubu.kokushikan.ac.jp/chiri/HPphoto/04SepTaiwan/page.html>